

# 講演Ⅲ 西谷思想の海外に於ける評価に関する一考察

J・ヴァン ブラフト

時間をあまりとらないように、ごく簡単に報告させていた  
だきたいと思う。予め言っておきたいが、この短い発表の意  
向は、西谷先生の影響力を、いわば量的に計ることであり、  
けっしてその思想の影響を思想的に分析することではない、  
ということである。

まず、我々がどうして西谷先生の海外に於ける評価を知り  
たいのだろうかという問題がある。一般的に言って、我々が  
皆ある程度その哲学に参加しているのので、その評判に興味を  
持っていても極く自然であると言えるし、そういう「東洋的  
思想」の場合、西洋に於ける評判が特別なテストになるに違  
いないだろう。しかし、もう少し個人的な話を許していただ  
けば、『宗教とは何か』を英訳した時代から、その本を通じ  
て東西の本当の思想的対話が発生するだろうと、私は期待し  
てきた。その対話において、西洋の思想家が西谷（大きく言  
えば京都学派）の思想からおおいに学ぶと同時に、彼らの批  
判に刺激されて京都学派の思想が更に発展するだろうという

期待であった。今問題になるのは、その希望はどれくらい実  
現したか、上田閑照氏の言葉を借りて言えば、本当に「西谷  
先生の思索の意義が世界に大きくなりつつある」のだろうか。  
さて、西谷先生のような思想の評価や影響を計るというこ  
とはなかなか簡単ではないと思うが、その可能な尺度と考え  
られる点にそって、短く調べていきたいと思う。

一、西谷先生の英訳されている本はどれくらい売れているの  
か。

一九九四年十月までに売れたのは……

— Religion and Nothingness (一九八二)

八、九二五冊

— The Self-Overcoming of Nihilism (一九九〇)

一、〇七四冊

— Nishida Kitaro (一九九二)

七、六四冊

比較のために……

— H. Wadentfels, Absolute Nothingness (一九八〇)

三、〇〇〇冊

— Tanabe Hajime, Philosophy as Metanoetics (一九八六)

一、五五七冊

Religion and Nothingness の比較的な人気の秘密は、西洋人がそれにおいて多くの挑発的な考えを十分に説明された形で見つけることが出来るというところにあるだろう。それと違って、例えば西田先生の『場所的論理と宗教的世界観』は、彼の前の書物の知識を前提とする形でしか、その考え方を説明してはいないと言えるだろう。

二、その思想は大学でどれくらい教えられているのか。

特別に調べたことはないが、ヨーロッパでは皆無ではないかと思われる。米国ではいろいろなところで教えられるようだが、私のこの春に経験したところからすると、ボストン地方では『宗教とは何か』をテキストに使うコースは三つあったのである。

三、その思想はどれくらい引用されているのか。

この点でもあいにく統計がなくて、詳しい話は出来ないが、英文の学術雑誌において Religion and Nothingness はよく引用されるという事は確かだ。ドイツ語やフランス語の雑誌はほとんど手に入らないので、判断しにくいだが、それに合わせる西谷先生のテキストの引用は恐らく非常に少ないだろう。

四、海外の学者による、評価の直接的表現はどれくらいあるのか。

皆さんご存知の通り、本の評価はまず書評において現れるが、『宗教とは何か』になると、積極的な書評はたくさん出たのである。そして、西谷思想をテーマとするシンポジウムが一九八四年に米国の Smith College と Amherst College で開かれ、その記録が後に本の形で (The Religious Philosophy of Nishitani Keiji, 一九八九) 発行されたということも高い評価の印に違いないのである。

上の四点はある程度西谷思想の西洋に於ける評価度を指示するものではあるけれども、思想家の本当の影響は、自分を彼の弟子と言わなくても、自分の思想において彼に深く影響され、哲学する時に彼を絶えず相手にする人々が生まれるところにあるだろう。米国にはそういう学者が多少——といっても、その数はまだ少ないが——居ると言えるのである。しかし、その学者がどの学問的分野に属するかという点に注意しなければならぬと思う。またおおざっぱな話になるけれども、今の問題に当を得た分野を見ると、次のような picture が出ると思うのである。

——西谷先生の思想とまじめに取り組む学者の大多数はキリスト教の神学者、とりあえず仏教・キリスト教の対話に関心を持つ神学者のうちに見当る。それは、西谷思想の宗教的

性質からすれば、無理もないかもしれない。

——次に、仏教学者を見ると、彼らの間に西谷先生の「教的」哲学を参考にする者がどれくらいいるのだろうか。私の知っている限り、その数は非常に少なく、彼らのほとんどは西谷思想に学ぶよりも、直接その思想の源泉である龍樹などに行つた方が有益だと思つようである。

——最後に、西谷先生ご自身がいちばん相手にしてもらひなかつた哲学者はどうだろうか。少し過言になるがもしれないうが、西洋の純粋な哲学者の間には、西谷先生（大きく言えば京都学派）の影響はまだ皆無に近いと思われるのである。ここで「純粋な哲学者」と言うのは、哲学を狭義の *Wissenschaft* と見て、他に日本と特別な関係を持たない学者という意味である。

さて、西洋の哲学者のこの無関心の原因はどこにあるのだろうか。考えられるのは次のことではないかと思ふ。

——まず、現在西洋の哲学界が、ライプニッツやヘーゲルの時代よりも、閉鎖的 (*parochial*) になつたとよく指摘されるのである。

——西洋をその本来の場とする哲学には、独特で、内的必然性を持つような、歴史的な流れがあり、外からその中に入ることが不可能に近いように見えるのである。京都学派のどちらかといえば存在論的な思想は、存在論がほとんどタブーになつた現在よりも、例えばヘーゲルの時代なら、もっと西

洋の哲学界に入りやすかつたのではなからうかと、時々考えることがある。

——しかし、問題の一部は、西谷先生（京都学派一般）の哲学の性質にあるとも言わざるをえない。内的に宗教的で、理性を超える地平に開いたもの（いわば「全哲」として、この哲学は現代西洋の哲学（いわば「純哲」と根本的に違つて）ではないだろうか。「西田哲学の性格と西洋哲学界の現在状況からして、西田は『純粋哲学者』よりも、『宗教思想家』として承認されるであらう」と私はだいたいぶ前に一度書いた通りではないだろうか。同じく、非常にまじめに西谷の思想と取り組んでいる神学者、Langdon Gilkey は自然にその思想を「仏教的哲学的神学」と名付けているのである。それは本当にそうであるなら、京都哲学と西洋哲学との合流は、後者の「懺悔」を待たなければならぬであらう。

最後に、反省してもらいたいところを一つ挙げたいと思ふ。すなわち、西洋において京都哲学への関心を促進しようと思えば、向こうから来る批判を真面目に受け取つて、それに丁寧に答えること程よい方法はないのであるが、京都哲学の後継者は本当にそういう態度をとっているのだろうか。